

六月の紫陽花は

雨に降られ美しく咲く

登場人物

泉 梨紗	(1 7)	高校 3 年生・生梦葵
北川 真由美	(3 3)	霊納師
飯塚 直樹	(2 7)	守霊師
八神 京介	(3 6)	憑霊師
神谷 司	(3 0)	霊導師
樋口 里奈	(1 7)	梨紗のクラスメイト
平田	(1 8)	〃
藤本	(1 7)	〃
中山	(1 7)	〃
木下	(3 5)	梨紗の担任
奥山 翔太	(1 7)	高校 3 年生
大場 菜月	(1 7)	翔太の幼なじみ
大場 美穂	(5 3)	菜月の母
大場 一郎	(5 5)	菜月の父
神原 優花	(2 4)	人気女優
稲葉 彩	(2 2)	女優
泉 健一	(4 8)	梨紗の父
泉 純子	(4 5)	梨紗の母
泉 駿	(1 5)	梨紗の弟

○古びたビル・屋上（夜）

女が屋上の淵に立ち遠くを見ている。
足元には靴が綺麗に揃えてある。
目を瞑り、一步踏み出す。

○泉家・梨紗の部屋（朝）

ベッドで目を覚ます泉梨紗（17）

梨紗M「知らない誰かがまた1人消えていく。
その誰かがいつか私であってほしい。夢で
はなく、この汚れた世界で」

○同・リビング（朝）

泉健一（48）泉純子（45）泉駿（15）
が食卓を囲んでいる。

純子「駿が模試で全国10位だったの」

駿「大したことないよ。最低でも5番以内に
入らないと自慢にもならない」

泉「その通りだ駿。上にいれば使う立場に立
てる。下にいる人間はゴミと変わらない。
一度でも道を外れれば・・・」

泉、上を見る。

泉「ああいう、社会にとっていくらでも補充の利く人間になる。そういう人間は誰からも必要とされず、二度と戻れなくなるぞ」
駿「大丈夫だよ。逆にどう生きてたらあんな底辺に落ちられるのか聞いてみたいよ」

○同・廊下（朝）

梨紗、リビングの扉の前で泉たちの会話を聞いている。

純子の声「何であんな子が産まれたのかしら。
駿は今みたいに勉強して、ちゃんと西大に行ってね」

駿の声「当然だよ」

○駅のホーム（朝）

サラリーマンや学生が列をなしており、先頭には梨紗が立っている。
電車がホームに入ってきて来ると、一歩前に踏み出す。

梨紗 M 「産んでほしいなんて頼んでない。もし選択肢が与えられていたら、私はこの世界に存在しない」

目を瞑り、さらにもう一步踏み出そうとするが足が止まる。

電車が梨紗の前を通過すると、ゆっくりと目を開く。

梨紗 M 「誰かと戦う勇敢さ。何度躓いても立ち上がれる強さ。そんな力はもう望まない。たった一步、その一步を踏み出せる勇気がほしい」

○東女子高等学校・廊下（朝）

生徒たちが登校している。

生徒 A 「大学どこ行く？」

生徒 B 「西大」

生徒 A 「いや無理でしょ。うちの学校じゃ」と笑いあう2人。

その後ろを梨紗が歩いている。

樋口の声「泉さん」

振り返ると樋口里奈（17）

樋口「おはよう」

梨紗「（ぼそつと）おはよう」

と言って、足早に去って行く。

前を見ると、平田（18）中山（17）

藤本（17）が歩いて来る。

生徒A、B、道を開ける。

梨紗、廊下の端に寄る。

藤本、すれ違いざまに梨紗の肩にぶつかる。

藤本「何か言うことは？」

梨紗「・・・ごめん」

中山「偉いね、謝れて」

藤本たちが笑いながら去って行く。

梨紗、立ちすくんでいる。

樋口、梨紗を見ている。

○横井家・和室

北川真由美（33）、飯塚直樹（27）

横井（56）が仏壇の前に座っている。

仏壇には20代前半の男の写真。

横井「もう2年くらい会ってなかったんです。

まさか自殺するなんて・・・」

直樹「左手の小指に糸で結んだような印があったって」

横井「ええ、最初はタトゥーかと思ったんですけど、そんなの入れる子じゃなかったし、それに火葬するときは消えてたんです。何だったのかしら・・・」

○走る車内

運転席には直樹。隣には真由美。

直樹「やっぱり生夢葵（ウムギ）でしたね」

真由美「うん」

直樹「何で自死を考えてる人間に継承するんだろう？」

真由美「分からない。でも意味があるんだと思う。死を纏った人間を選ぶ理由が」

○東女子高等学校・昇降口

生徒たちが下校している。

梨紗、下駄箱の扉を開けると紙パックなどが投げ入れられる。

振り向くと平田、中山、藤本。

藤本「ここにゴミ箱欲しかったんだよね」

中山「分かる。でも靴入ってなかった？」

藤本「それもゴミでしょ」

藤本たちが笑いながら去って行く。

梨紗、肩に掛けた鞆の持ち手を左手で強く握る。

左手の小指には糸で結ばれた印。

○駅前

サラリーマンや学生が行きかっている。

その中を梨紗が歩いている。

制服に何か当たり、視線を移すと雨粒で濡れている。

空を見上げる梨紗。

すると激しい雨が降ってくる。

梨紗M「まるで人間みたい。笑ってたかと思

ったら急に泣いたり、突然唸りを上げたりもする。こんな気ままに感情を出せたら、どんなに楽なんだろ」

前を向くと、周囲の人たちが駅に向かって走っている。

梨紗 M 「人は雨を避ける。打たれない居場所を探し、雨が止むまで待ち続ける。そんな場所、この世界のどこにあるんだろう」

再び空を見上げると、曇り空で覆われている。

○神谷家・居間

少し年季の入った広い畳の部屋。

そこに真由美と直樹が入ってくる。

直樹、居間の障子を開ける。

縁側の先に閉じた木枠のガラス戸。

そこから庭に咲く紫陽花が見える。

真由美、テレビをつけると神原優花(2

4)が映る。

直樹「この子最近よく出てますね」

真由美「へー、そうなんだ」

○テレビ局・スタジオ

優花、稲葉彩（22）橋本（26）がアナウンサー（以降アナ）から質問を受けている。

アナ「神原さんは好感度ランキングでも上位に選出されていて、笑顔が素敵というイメージなんです。現場ではどうですか？」

橋本「優花ちゃんがいつも笑ってくれるから、疲れていても頑張ろうって気になるので助かってます」

優花、笑顔を見せる。

アナ「そういう人がいると現場も明るくなりますよね」

橋本「ええ」

アナ「稲葉さんはどうですか？」

彩「笑いたい時は笑えばいいし、辛い時は無理に笑わなくていい。イメージを押し付けるのは好きじゃないです」

優花、彩を見てる。

アナ「そうー・・ですよね。じゃあ次の質問にいききたいと思います」

○同・控室前の扉

菊池の声「仕事なんだからちゃんとやれ」

○同・控室

菊池（43）、が彩に怒鳴っている。

優花、不安げな顔で2人を見てる。

菊池「そんな態度だったら仕事無くなるぞ」

彩「本当のこと言っただけです」

菊池「女優は笑って答えてりゃいいんだよ。

お前らは商品なんだから、売れることだけ考えてろ」

彩「売れることがそんなに大事ですか？それよりもどう売れるかじゃないですか？」

菊池「その生意気な態度どうにか・・」

ドアが開きプロデューサー（以降P）が入ってくる。

菊池 「今日は大変失礼しました」

P 「いいの、いいの」

彩、鞆を持ち

彩 「お疲れさまでした」

と、控室を出る。

菊池 「稲葉」

P 「大変だね、変な女優持つと」

菊池 「そうなんですよ」

P 「その点、優花ちゃんは大丈夫そうだね」

菊池 「ええ、神原は言われたことだけやるか

ら大丈夫ですよ」

P 「こっちとしてはその方が助かるよ」

優花、苦笑いを見せる。

P 「そうだ、またドラマ決まったみたいだね」

菊池 「おかげさまで」

P 「儲かってるね」

菊池 「はい」

菊池とP、笑いあう。

優花、表情を曇らせる。

○走る車内（夜）

運転席に菊池。後部座席には優花。

菊池「ああはなるなよ。芸能人はイメージが
全てだからな」

優花「（ぼそっと）でも羨ましい」

菊池「何だ？」

優花「いえ」

菊池「お前は好感度があるんだから絶対下げ
るなよ。嫌なことがあっても笑って頷いて
ろ。それだけやってりゃいい」

優花「・・・寄るところがあるので、ここで降
ろしてもらってもいいですか？」

○表参道・ファッションストリート・路肩（夜）

車が路肩に停まり優花が出てくる。

優花「お疲れさまでした」

ドアを閉めると車が発進する。

○同・ファッションストリート（夜）

優花が歩いていると、前から大学生2

人が歩いて来る。

大学生 A、優花を見てる。

優花、顔を伏せすれ違う。

大学生 A 「今の神原優花じゃね？」

大学生 B 「ウソ？」

大学生 A、スマホを取り出し踵を返す。

優花を抜き去り、少し先でUターン。

電話するふりをしながら優花に近づいていく。

優花、顔を隠すようにすれ違う。

大学生 A、Bのもとに駆け寄りスマホを見せる。

大学生 B 「撮れてねーじゃん」

大学生 A 「もう一回行くか」

大学生 B 「流石にばれるっしょ」

優花、俯く。

○タワマン・優花の部屋・リビング（夜）

電気は付いておらず暗い部屋。

優花、ツイッターのコメントを見てる。

「可愛い」「大好き」など好意的なコメントの中に「笑った顔がうざい」「男受けに振り切った女優」など書かれている。

画面を消しテーブルの上に置く。

テーブルには菓の瓶が複数並んでいる。

○泉家・梨紗の部屋

梨紗、ベッドで横になっている。

そこに泉が入って来て、梨紗の前に千円札を放り投げる。

泉「適当につまみ買ってこい。クズでも使いぐらいは出来るだろ」

泉、部屋を出る。

梨紗が顔を上げると、部屋の前には駿が立っている。

梨紗と目が合うと、鼻で笑い去って行く。

○大場家のマンション・リビング

仏壇の前で手を合わせる奥山翔太（17）目を開くと、仏壇に飾ってある大場菜月（17）の写真が映る。

○同・玄関前

傘を持った翔太と大場美穂（53）が向かい合っている。

美穂 「来てくれてありがとうとね」

翔太 「いえ」

美穂 「菜月も喜んでる」

翔太 「・・・あの」

美穂 「何？」

翔太 「・・・いえ、それじゃあ」

美穂 「気をつけてね」

会釈して立ち去る翔太。

外を見ると雨が降っている。

○古びた雑居ビルの前の通り

梨紗、傘を差し歩いている。

すると、雑居ビルの前に置かれている

献花が映る。

献花は雨に打たれ萎れている。

立ち止まり、献花が濡れないよう傘を置く。

立ち去ろうとすると、黒く小さいものが梨紗の目の前を横切り、ビルの屋上に上がって行く。

屋上を見上げると、黒い煙のようなものが覆っている。

○古びたビル・最上階

梨紗、階段を上がってくる

最上階の扉には鎖が何重にも巻かれ、

南京錠がかけられている。

鎖を引っ張るがびくともしない。

踵を返し、階段を降りようとするとき「カチッ」と音が鳴る。

振り返ると南京錠が開いている。

○走る車内

運転席に直樹。助手席には真由美。

直樹、古びたビルを見つめる。

直樹「あれじゃないですか？」

真由美「前で止めて」

○古びたビル・前の通り

ビルの前に車が停まり、真由美と直樹
が出てくる。

真由美、屋上を見上げ

真由美「強いね」

直樹「黒（こく）ですね」

真由美、車から長羽織と水晶を取る。

真由美「行こう」

○同・屋上

梨紗、屋上の淵に足を掛け、遠くを見
つめる。

周りには黒い煙のようなものが覆って
いる。

梨紗 M「長い雨で心が色褪せ、そして枯れて

いく。これでやっと雨が止む」

目を瞑り、屋上の外に一步踏み出そう
とすると

直樹の声「結（けつ）」

梨紗が目を開くと周りに結界が張られて
いる。

黒い煙が結界の外におり、中に入ろう
としているが入れずにいる。

梨紗、扉の方を見ると直樹と真由美。

直樹は中指と人差し指で護符を挟み、
梨紗の方に向けている。

真由美は長羽織を羽織っており、手
は水晶。

直樹「ギリギリでしたね」

真由美「やっぱり怨念が強いね。ちよっと手
こずるかも」

真由美、前に出て水晶を突き出す。

黒い煙が大きく広がっていく。

真由美「厭悪（えんお）に繋がれし魂よ、黒
納（こくのう）の式により、憎しみで染ま

る邪念を鎮めよう。導くは霊納の師。魂を
納め霊導へと遁送する」

水晶が光りだす。

真由美「水晶よ、黒き魂を納めたまえ」

黒い魂が水晶に吸い込まれていく。

梨紗、呆然としている。

順調に吸い込んでいたが、黒い魂が抵

抗し、水晶から出て行こうとする。

真由美「抗うな。お前の居場所はここじゃない」

水晶の光がより強くなる。

黒い魂が再び水晶に吸い込まれる。

真由美「ここまでよくぞ耐え抜いた。その闇

夜の鎖はここで断ち切る。だが、苦しみの

果てに残した因果は我が心に刻もう」

黒い魂が水晶に納まる。

すると梨紗の周りの結界も消える。

真由美「後宜しく」

直樹「はい」

直樹、屋上の淵に行き護符を貼る。

直樹「護符よ、漂う陰の気を祓い彷徨う魂を守りたまえ」

梨紗、周りを見渡す。

真由美「空気が変わったでしょ？」

梨紗のもとに真由美が来る。

真由美「今のは自殺した魂。自死を考えてる人間を引きずろうとしたの」

梨紗、真由美を見てる。

真由美「自殺した魂は現世に留まる。それだけだったらまだいいんだけど、怨念がこもってたり、長い間彷徨ってると、黒（こく）と言われる魂に変わるの。黒になると死を考えてる人間を引き寄せて自殺に追い込む。さっきのがまさにそう」

直樹「ちなみに、黒の前の魂は白（はく）って言うんだ」

梨紗、直樹を見る。

真由美「自殺の名所なんかはよく人が亡くなるでしょ？あそこまでいくと回収するのが難しいんだよね。強すぎて憑かれるから」

真由美、梨紗の左手の小指にある結びの印に気づくと

真由美「あっ」

と、驚いた様子で、梨紗の左手を取る。

直樹も印に気づき

直樹「あっ」

真由美「やっと見つけた」

○神谷家・居間

梨紗と真由美、対面で座っている。

梨紗、庭に咲いた紫陽花を見ている。

真由美「綺麗でしょ。紫陽花って土の酸度によつて色が変わるの。不思議だよね、まるで人間みたい」

梨紗、真由美を見る。

真由美「環境によつて性格って変わるじゃん。

どこで生きるかでその人の色が決まる。人も花も変わらないんだなって」

梨紗、再び紫陽花を見る。

襖が開くと、古びた書物と箱を持った

直樹が入ってくる。

直樹「お待たせしました」

書物をテーブルの上で開く。そこには

「霊納師（れいのうし）」

「守霊師（しゅれいし）」

「憑霊師（ひょうれいし）」

「霊導師（れいどうし）」

「生梦葵（うむぎ）」と表記。

真由美「私たちは霊師と言って、魂を守ったり、導く役目を受け持つ。霊師にもいくつか種類があつて、この霊納師っていうのが私。魂を回収するのが務め。で、直樹は守霊師。魂を守るのが務め」

直樹「自殺した場所って陰の気が満ちるんだ。そこで命を絶つと、その魂は黒になりやすくなる。それを防ぐ為に護符を使って気を浄化させる。特に黒の場合は、魂を回収しても怨念だけはその場に残すから、後追いのように死者が続いてしまう。だから護符を貼って気を浄化させるんだ」

梨紗「その黒って言うのが、死にたいと思ってる人間を自殺させるんでしょ？」

直樹「そう」

梨紗「なら死なせてあげればいい。それで開放されるんだから」

直樹、梨紗を見てる。

真由美「魂が霊界に行った後、次の体に宿るんだけど、自殺した魂は弱くなるの。その魂で生まれると心が脆くなる」

梨紗「・・・」

真由美「でもね、魂は障害や困難を乗り越えて強くなっていく。子供の頃からすごい子っているじゃん。ああいう子って前世で誰よりも苦しんでるんだよね。それを乗り越えて強い魂で生まれ変わる。だから生きてるうちに救わなければいけない。それをできるのが・・・」

真由美、梨紗を指す。

梨紗「・・・」

真由美「名前は？」

梨紗「泉梨紗」

真由美「梨紗はこれ」

真由美、書物に書いてる生夢葵を指す。

真由美「結びの印が生夢葵の証」

梨紗、左小指にある結びの印を見る。

直樹「人が亡くなる夢を見るでしょ？あれは

予知夢。今は力が不安定だから、どのタイミングで見るかは分からない」

直樹、持ってきた箱を開ける。

中には小さい水晶が入っている。

直樹「これは生夢葵のみが扱える水晶」

直樹、水晶を梨紗に手渡す。

直樹「握って」

梨紗、水晶を握る。

すると水晶が手の中で光りだす。

梨紗、驚いた様子で握った手を見ている。

しばらくすると光が消える。

直樹「開けてみて」

手を開くと水晶の色がラベンダーアメ

ジストに変わっている。

直樹「水晶は魂と繋がっていて、力をもたらしてくれる」

真由美「もう1人で見なくていい。私たちも

一緒」

梨紗、水晶を見る。

○車内・泉家の前（夜）

車が梨紗の家の前に停まっている。

運転席に直樹、助手席に真由美。

後部座席には梨紗。

直樹「ごめんね遅くまで」

真由美「ねえ、連絡先教えて」

梨紗「家にあるから取ってくる」

車から降り、家に入っていく。

× × ×

直樹、腕時計を見る。

直樹「遅いですね」

真由美「ちよっと行ってくる」

○泉家・玄関外（夜）

真由美、玄関前に立っている。

扉が開き、純子が出てくる。

真由美「夜分遅く申し訳ありません。梨紗ち

やんの知り合・・・」

泉の声「お前に生きてる価値なんてない！」

リビングから泉の怒号が聞こえる。

純子「ごめんなさい。今取り込んでるので」

と、扉を閉めようとするが真由美が

手で押さえ強引に家の中に入る。

純子「ちよっと」

○同・リビング（夜）

泉、梨紗の顔をテーブルに押し付けている。

駿、怯えた様子で見ている。

泉「買い物もろくに出来ないのか、お前は」

真由美、入って来る。

真由美「何やってんの！」

と、泉から梨紗を離す。

そこに純子が入ってくる。

泉「誰だ」

純子「勝手に入ってきたの」

真由美「大丈夫？」

梨紗「・・・」

泉「おい、人の家に勝手に入って・・・」

真由美「あんた父親でしょ」

泉「警察呼べ」

真由美「呼んだら。娘に暴力振るってた理由が説明出来るならね。この子はうちで預かる」

純子「そんなの誘拐じゃない」

真由美「どの面で被害者ぶれるの」

泉「だったら学費やその他の経費、お前が全部払え」

真由美、泉に詰め寄り

真由美「全部払ってやるよ。大学に行きたいって言ったら行かせる。やりたいことがあったら応援する。好きな子が出来たら相談にのる。あんたが親として出来なかった事

を私が全部やってやる。だからこの子に1ミリも近づくなよ。もし目の前に現れたら、その腕と首へし折って玄関に飾り付けてやるから」

泉、後ずさる。

真由美「荷物まとめて。こんな肥溜め出て行くよ」

真由美と梨紗、リビングを出る。

○走る車内（夜）

運転席に直樹。助手席に真由美。

後部座席には大きな鞆を持った梨紗。

真由美「あの親父、マジでムカつく」

直樹「何があっただんですか？」

○神谷家・梨紗の部屋（夜）

暗い部屋に窓から月明かりが入る。

梨紗、部屋の隅に座っている。

真由美の声「入っていい？」

梨紗「うん」

真由美が入って来ると、梨紗の隣に腰掛ける。

真由美「私の親ね、酒とギャンブルが好きで、毎日のように罵ってくる最低の人間だった」

梨紗、真由美を見る。

真由美「人ってさ、自分じゃ測れないものは否定するの。文句ばかりの人間は、持つてる物差しが短いんだよ。そんなやつ言うことなんて気にしなくていい。否定されるってことは、それだけ大きいってこと。梨紗が悪いわけじゃない」

梨紗「・・・」

真由美「じゃあ、おやすみ」

真由美、部屋を出る。

梨紗、窓から入る月明かりを見る。

○居酒屋・休憩室（夜）

数名の男女が話している。

翔太、離れたところで着替えている。

女「奥山君、この後カラオケ行くんだけど行

かない？」

翔太「いえ、今日は帰ります」

翔太、休憩室から出て行く。

男A「あいつ最近付き合い悪いな」

女「幼なじみが亡くなったんだって」

男B「マジ？」

○交差点（夜）

ガードレール前に立つ翔太。

その後ろを通行人A、Bが通る。

通行人A「ここで最近自殺あったらしいよ」

通行人B「えっ、また」

翔太の視線の先には献花が映る。

○神谷家・玄関（朝）

梨紗、靴を履き玄関の前で立ち止まる。

ブレザーのポケットから水晶を取り出

して眺める。

直樹「待って」

直樹、ランチバックを持ってくる。

直樹「作ったから持ってって」

梨紗に手渡す。

梨紗「・・・ありがとう」

直樹「行ってらっしゃい」

梨紗、玄関を出る。

○同・3年D組

生徒たちがノートを取っている。

教卓には教師A。チャイムが鳴る。

教師A「じゃあ今日はここまで。次はこの続きからだ」

教師A、教室を出る。

梨紗、鞆を持って教室を出ようとする。

藤本の声「泉」

梨紗、立ち止まる。

後ろから藤本、中山、平田が来る。

中山「財布忘れたからお金貸して」

梨紗「こないだの分、返してもらってない」

藤本、梨紗の鞆を奪い取る。

梨紗「ダメ」

中山、梨紗を抑える。

平田、少し離れた場所で見ている。

藤本、鞆からランチバックを取る。

藤本「弁当なんて珍しいじゃん」

ランチバックから弁当箱を取り出し、

蓋を開ける。

藤本「物足りないね」

近くの生徒の筆箱からシャー芯のケー

スを取り出し、中身を全部出す。

それを細かく折り、弁当に撒く。

中山「美味しそう」

藤本、梨紗に弁当箱を渡す。

藤本「何か言うことは？」

梨紗「・・・」

藤本、一歩詰め寄り

藤本「言うことあるでしょ？」

梨紗「・・・ありがとう」

中山「やば」

藤本、梨紗の鞆から財布を取り出す。

樋口「待って」

樋口、財布から千円札を取り出し、藤本に渡す。

樋口「私が貸すから」

平田、樋口を見る。

藤本「良かったね泉。優しい樋口さんが貸してくれたよ」

と、言い言い残し中山、平田と教室から去って行く。

樋口、鞆から弁当箱を取り出す。

樋口「良かったらこれ食べて」

梨紗「大丈夫。ありがとう」

梨紗、自分の弁当を持って教室を出て行く。

○同・校庭・手洗い場

梨紗、玉子焼きを洗っている。

洗い終わり弁当箱の蓋に置く。

弁当箱から照り焼きチキンを手に取り、洗おうとするが、手が滑り落としてしまふ。

照り焼きチキンの上に蛇口から出る水が流れ落ちる。
タレが流れ落ち、色が薄くなっていく。
梨紗、落ちた照り焼きチキンを見ている。

○同・廊下

廊下には下校中の生徒たち。

梨紗、鞆を肩に掛け歩いている。

生徒C「雨降ってんじゃん」

生徒D「今日、降んないって言ってなかった？」

窓の外を見ると雨が降っている。

梨紗の後ろには樋口が歩いていおり、

心配そうに梨紗を見ている。

すると、樋口の横を藤本が走り抜ける。

藤本、梨紗のもとに行くと鞆を奪って

窓の外に放り投げる。

藤本「よっしゃー新記録！オリンピックク出れるんじゃね？」

中山「そんな競技無いから」

後ろから平田と中山が歩いて来る。

藤本「カラオケ行かね？」

中山「昨日も行ったじゃん」

平田たちが去って行く。

樋口、その場に立ち尽くす梨紗を見て
いる。

○同・校庭

梨紗、雨に打たれながら地面に落ちて
いる鞆を見ている。

そこに傘が差される。

振り向くと樋口の姿。

樋口「持って」

梨紗、折り畳み傘を受け取る。

樋口、タオルを取り出し、落ちている

鞆を拭いて梨紗に渡す。

樋口「この雨も去って笑える日が来る。だから・
もう少しだけ待ってて」

樋口、雨に打たれながら去って行く。

○同・校門

傘を差した梨紗が俯きながら出てくる。

直樹の声「梨紗ちゃん」

前を見ると傘を差した真由美と直樹。

直樹「魂の回収でこの近辺周ってたんだけど、

雨降ってきたから迎えに来た」

真由美「傘持ってたんだ」

梨紗「・・・うん」

○走る車内・大場家マンション前の道

運転席に直樹。助手席に真由美。

後部座席に梨紗。

直樹「この辺から感じますね」

真由美、マンションを見つけ

真由美「あのマンション」

直樹、車をマンション前に停める。

直樹「ここですね」

梨紗、ブレザーのポケットを見ると、

紫の光りが漏れている。

ポケットに手を入れ、紫に光る水晶を

取り出す。

直樹、梨紗を見る。

直樹「真由美さん」

真由美、振り返ると、光る水晶を目視する。

真由美「握って」

梨紗、水晶を握る。

真由美「目を瞑ると人の死が見える。夢で見てたやつ。でも違うのは梨紗が見たものを私たちも共有できる」

真由美と直樹、水晶を握った梨紗の拳に手を乗せる。

直樹「後は梨紗ちゃんのタイミングで」

梨紗、二人の手を見る。

そしてゆっくりと目を瞑る。
それに合わせるように、2人も目を瞑る。

○回想・交差点（夜）

ガードレール下の献花を見ている翔太。

そこに赤い車がやって来る。

道路に飛び出すとクラクションが鳴り、
ヘッドライトが翔太を照らす。

○車内・大場家マンション前の道

梨紗、目を開ける。

直樹「男の子ですね」

真由美「うん」

梨紗「・・・」

直樹「梨紗ちゃん、手開けて」

梨紗、手を開けると光を帯びた水晶が
浮かび上がり、吸い込まれるように消
えていく。

直樹「水晶の位置分かる？」

梨紗、マンションを見る。

直樹「魂と連結してるから感じるでしょ？」

真由美「行こうか」

○大場家マンション・リビング

翔太、仏壇の前で手を合わせている。

美穂、後ろから翔太を見ている。

美穂 「翔太君、毎日来なくても大丈夫だよ」

翔太 「話さないといけないことがあって」

美穂 「何？」

○同・大場家前の通路

直樹、真由美、梨紗がエレベーターから出てくる。

真由美、羽織と水晶を持っている。

直樹 「魂もこの階ですね」

真由美 「うん」

大場家の前で光っている、紫の水晶を見つめる。

直樹 「あった」

水晶に向かって歩いて歩く3人。

大場家の前に着くと

直樹 「水晶の下に手を置いて」

と言われ、水晶の下に手を置く。
すると帯びていた光が消え、水晶が梨紗の手の中に落ちる。

真由美「魂もこの部屋だね」

直樹「どういうことですかね？」

真由美「とりあえず入ろう」

梨紗「どうやって入るの？」

直樹「家の中に魂がいる場合は大体が家族だ
ったりするんだ。だから・・・」

○同・大場家リビング

翔太と美穂、向かい合って座っている。

翔太、俯いている。

美穂「どうしたの翔太君？話して」

翔太「・・・実は」

インターホンが鳴る。

美穂「ちよっと待ってて」

ドアホンを見ると直樹、真由美、梨紗。

美穂「はい」

直樹の声「突然申し訳ありません。知人から
ご自宅を伺いまして、お線香だけでもと」

美穂と翔太、顔を見合わず。

美穂「分かりました。お待ちください」

○同・大場家・玄関前

直樹、真由美、梨紗が玄関前に立っている。

直樹「つていう感じ」

梨紗「犯罪者みたい」

直樹「でも悪いことするわけじゃないから」

玄関の扉が開き美穂が出てくる。

直樹「こんにちは」

○同・大場家リビング

翔太、菜月の遺影を見てる。

美穂、直樹、真由美、梨紗が入ってくる。

直樹、翔太を見る。

直樹「こんにちは」

翔太「こんにちは」

直樹「（小さい声で）この子ですね」

真由美「うん」

梨紗、翔太を見てる。

× × ×

テーブルを囲む5人。

人数分のお茶が並んでいる。

真由美、部屋を見渡してる。

美穂「翔太君以外にお線香あげてくれる人がいたなんて。菜月とはどのような関係で？」

真由美「えーっと・・・」

直樹「ネットで知り合ったんです」

美穂「ネットで？」

直樹「はい」

美穂「今はそういう時代なんですね」

翔太「菜月、何か言ってますませんでした？悩み

だったり、友人関係のこととか」

真由美「何か言ってたような・・・」

翔太「何て言っていました？」

真由美「何て言ってたかな・・・」

直樹「翔太君と菜月さんでどういう関係？」

美穂「幼なじみなんです。菜月は引っ込み思

案で人と接するのが苦手だったんですけど、

唯一心を開けたのが翔太君」

翔太「・・・」

美穂「昔から死にたいが口癖で、その度に翔太君が家まで来てくれたんです。おかげで私たち家族も助けられた」

直樹「亡くなった場所って？」

美穂「近くの交差点です。急に飛び出して跳ねられたみたいで」

直樹「そうでしたか」

翔太、俯いてる。

真由美「会ってみます？娘さんに」

美穂、真由美を見る。

○同・菜月の部屋

美穂、真由美、直樹、梨紗、翔太が入ってくる。

直樹の手には水晶と長羽織。

美穂「ここが菜月の部屋です」

真由美「うん。ここだね」

直樹、水晶を真由美に渡し、長羽織を羽織らせる。

美穂「何をするんですか？」

直樹「菜月さんの魂を回収します」

美穂「魂？」

直樹「ええ」

真由美「まあ、すぐ終わりますよ」

真由美、部屋の中央に行き水晶を突き出す。

一同、真由美を見ている。

真由美「彷徨いし魂よ、白納（はくのう）の式により現世に繋がれし枷を今外そう。導くは霊納の師、魂を納め霊導へと遁送する」

部屋に白い煙が現れる。

美穂「何これ・・・」

直樹「娘さんの魂です」

美穂、直樹を見る。

真由美「水晶よ、白き魂を納めたまえ」

魂が水晶に吸い込まれていく。

翔太、驚いた様子で見ている。

真由美「ここまでよくぞ耐え抜いた。来世の花は清く美しく、強さを持って根を張るところを祈ろう」

魂が全て水晶に納まる。

真由美「よし、終わり」

直樹「この後は憑霊師に魂を預けます。そこで菜月さんに会えますよ」

美穂「・・・」

真由美「本来なら魂は亡くなった場所に留まるの。ここにいてるってことは何か伝えたいことがあるんだと思う。それで私たちを導いた」

翔太「・・・」

○神谷家・客間（夜）

広めの客間に梨紗、真由美、翔太、美穂が座っている。

真由美、イラついている。

そこに直樹と大場一郎（55）が入ってきて来る。

大場「翔太君まで」

直樹「座ってお待ちください」

真由美「あのバカはいつ来るの？」

直樹「もう着くとは言ってたんですけど・・・」

大場、美穂の隣に座る。

大場「菜月に会えるってどういうことだ？」

美穂「私もまだよく分からないんだけど、菜

月の魂を見たの」

大場「魂？」

美穂と大場の前に直樹が来る。

直樹「お待たせしてしまつて申し訳ありません。これから憑霊師と呼ばれる人が来ます」

大場、不思議そうに直樹を見てる。

直樹「魂を憑依させて、亡くなった人を一時的に蘇らせることが出来るんです」

大場「そういう類のものは否定はしません。

だけどそういったものに入るつもりはない

ので、申し訳ありませんが今日は帰らさ

せていただきます」

大場、立ち上がる

直樹「そういう類のものと言えばそうなんです
すが、でもそういう類のものではなくて・・・」

大場「帰ろう、翔太君も」

美穂、大場の手を握る。

美穂「大丈夫。信じて」

大場、美穂を見ているとガラス戸を叩く音が室内に響く。

一同視線を移すと、僧衣を着た八神京介（36）が紙袋を持って庭に立っている。

直樹「来た」

直樹、ガラス戸を開ける。

八神、サンダルを脱ぎ客間に上がる。

八神「いやー近所の婆さんが家上がってけているから入ったんだけどさ、話し長げーの。これお土産」

八神、紙袋を直樹に渡す。中には菓子。

直樹「ありがとうございます」

真由美「遅い」

八神「まあそんなカリカリすんなよ。あとで

お菓子あげるから」

真由美「いらない。早く初めて」

八神「水晶は？」

直樹、水晶を持ってきて八神に渡す。

八神、水晶を手にとると目を瞑る。

しばらくして目を開くと、周りを見渡し、梨紗を見る。

八神「女子高生、そこ座って」

梨紗、戸惑いながら翔太たちの前に座る。

八神「お前が一番波長が近い。影響なく憑依出来る」

直樹「憑依させると、その魂が持つ思考や感情が憑依者に伝わってくるんだ。人によっては影響を受ける場合がある。だからできるだけ波長が近い人に憑依させるんだ」

梨紗「・・・」

直樹「嫌だったら僕か真由美さんが変わる。

波長の問題だから性別関係なく出来るし」

梨紗「・・・大丈夫、私がやる」

直樹「ありがとう」

八神「じゃあ今から・・・」

翔太「あの」

一同、翔太を見る。

翔太「2人に言っておかないといけなことがあつて」

美穂と大場、翔太を見る。

翔太、頭を下げ

翔太「ごめんなさい。菜月が自殺したの自分のせいなんです」

美穂「どういうこと？」

翔太「菜月が亡くなった日、実は会ってたんです」

○回想・カラオケ（夜）

男女数名がカラオケを楽しんでいる。

翔太、男が歌っているのを見てる。

スマホが鳴り、画面を見ると菜月。

翔太「すいません、ちよつと出ます」

○回想・同・廊下（夜）

翔太、電話に出る。

翔太「もしもし」

菜月の声「今何してる？」

翔太「バイトの人とカラオケ」

菜月の声「そうなんだ。いいね、友達が多
くて」

翔太「用が無いなら切るけど」

菜月の声「もう生きてるの疲れちゃった」

翔太、呆れた様子でいると女が来る。

女「次、翔太君だよ」

翔太「はい」

電話に戻り

翔太「じゃあ切るぞ」

と、通話を切る。

女「彼女？」

翔太「違います」

翔太と女、部屋に戻る。

が、一旦立ち止まりスマホを見る。

翔太「あの・・・」

○回想・公園（夜）

菜月、ベンチに座っていると翔太が来る。

菜月「来てくれたんだ」

翔太「・・・もう止めてくれないかな」

菜月、翔太を見てる。

翔太「毎回毎回死にたいとか、疲れたとか、うんざりなんだよ。こっちだって付き合いがある。いい加減1人で背負ってくれ。もう無理だよ」

菜月「でも私には翔太しかいないし」

翔太「そっちの学校で作ればいいだろ。いちいち俺に頼るな」

菜月「・・・」

翔太「どうせ構ってほしただけだろ。死にたいなら勝手に死んでくれ。どうせ死なないだろ」

菜月「・・・分かった。ごめんね、迷惑かけて」

去って行く菜月。

その後ろ姿を見ている翔太。

○神谷家・客間（夜）

梨紗、真由美、直樹、八神、美穂、大

場が翔太を見てる。

翔太「あんなこと言わなければ、今も菜月は生きてた。俺が殺したんです」

美穂・大場「・・・」

八神「どういう事情があれば、生きてる時と死んだ後じゃ見えるもんが変わる。そいつの今の言葉を聴いて、背負うもんを決める」

翔太「・・・はい」

八神、梨紗の前に立つ。

八神「今からお前の体に魂を憑依させる。憑依されてる間は意識はあるが体を動かすことも話すことも出来ない。まあそんなくらいか」

直樹「ごめんね梨紗ちゃん。こんな大役任せちゃって」

梨紗「この人の感情が知りたい。同じものを持つてるかもしれないから」

真由美、梨紗を見てる。

梨紗、翔太たちの前に座る。

八神、梨紗の後ろに立つ。

八神「始めるぞ」

直樹が下がると八神が水晶を突き出す。

八神「白納により納まりし魂よ、これより、
転置の儀を執り行う。儀を務めるは憑霊の
師。この儀にて魂を万物の霊長へと移し変
える」

水晶から白い煙が出て梨紗を覆う。

大場、驚いた様子。

梨紗、眠るように目を瞑る。

全身に煙が覆い梨紗が見えなくなる。

徐々に煙が薄れていくと梨紗が菜月に

変わっている。

翔太「菜月・・・」

八神、その場から離れる。

菜月、ゆっくり目を開ける。

美穂「菜月なの？」

菜月「お母さん」

大場、呆然としている。

菜月、翔太を見る。

菜月「久しぶり、翔太」

翔太、頭を下げる。

菜月「ごめん菜月。あの時ちゃんと向き合っ
てれば、今もお前は・・・」

菜月「翔太のせいじゃない」

翔太、菜月を見る。

菜月「翔太には色んなもの背負わしちゃった。

ダメだって分かっていたのに、その優しさに
甘えてた。本当にごめん」

翔太「・・・」

菜月「散々迷惑かけて、沢山苦しめちゃった
けど、翔太には感謝してる。あの時来てく
れてすごい嬉しかった」

菜月、大場と美穂の方に視線を移す。

菜月「お父さんとお母さんには、ずっと迷惑
かけてきちやったね。もっと親孝行な子供
だったら2人とも幸せになれたのに」

美穂「そんなことない。菜月で良かった」

大場「菜月とは喧嘩ばかりだったが、生まれ
て来てくれたこと、本当に感謝してる」

菜月、微笑む。

菜月「翔太にお願いがあるの」

翔太、菜月を見る。

菜月「この体を借りてる子を助けてあげてほしい。生きてる時の私と似てる。死にたい時って、頭の中がどう死ぬかで埋め尽くされる。今はもつとオシヤレすればとか、好きな人とデートしてとか思えるけど、死にたいってなったら、そんなこと考えるスペースは無いの。この子はもうすぐ埋め尽くされる。だから救ってあげてほしい」

翔太、菜月を見てる。

菜月「生きてても辛いことばかりかもしれない。でも私みたいにはなってほしくないの。この子が救われる場所を作ってあげて。きつとどんな言葉より力になる」

翔太「うん」

菜月の体から白い煙が出始める。

大場「これは？」

直樹、八神のもとに行く。

直樹「京介さん」

八神 「憑依者の精神が拒絶してる」

八神、菜月のもとに行く。

八神 「時間だ」

美穂 「もう終わりですか？」

八神 「これ以上やると精神がもたない。最後に言い残したことは無いか？」

菜月、美穂と大場を見る。

菜月 「たくさん苦勞掛けてごめん。2人でゆっくり旅行にでも行って。私が居た時は行けなかったでしょ？」

大場、ハンカチで目を拭う。

菜月 「私が死んだのは翔太のせいじゃない。もう一度翔太に謝ろうと思ってたの。でも交差点に立ったら、いつの間にか道路に飛び出してた」

真由美、菜月を見る。

菜月 「もう背負わないで。散々わがまま聞いてもらったけど、これが最後のお願い。それと・・・幸せに生きて」

翔太、涙を流す。

菜月、八神を見る。

菜月「これ以上いるとこの子の負担になるんですよね？戻してあげて下さい」

八神、菜月の後ろに立ち水晶を出す。

八神「万物の霊長に宿りし魂よ、転置の儀・

返納により、その魂を水晶に引き戻す。現

世での最後の刻、見届けるは憑霊の師。来

世の空では黎明の光が射すことを祈ろう」

菜月の体を煙が覆い始める。

菜月「じゃあね」

煙が全身を覆い水晶に吸い込まれる。

翔太、その様子を見ている。

煙が全て消えると菜月が梨紗に変わる。

梨紗、ゆっくりと目を開ける。

直樹「お疲れ様。終わったよ」

梨紗「・・・」

○同・玄関（夜）

翔太、美穂、大場、並んで立っている。

向かいには梨紗、真由美、直樹、八神。

大場「少し楽になりました。久しぶりに菜月の笑顔が見れて良かったです」

美穂「本当にありがとうございます」

真由美「いーえ、お構いなく」

八神「何でお前が言うんだよ」

美穂「それじゃあ失礼します」

美穂と大場、玄関を出ようとするが翔太がその場に留まる。

美穂「翔太君、帰ろう」

翔太「先に帰っていて下さい。少し話したいので」

翔太、梨紗を見る。

○同・居間・縁側（夜）

外は雨が降っている。

梨紗と翔太、縁側に座っている。

居間には真由美、直樹、八神。

翔太「菜月の感情ってどんな感じだった？」

梨紗「暖かい。温度は無いけどそんな感じ」

翔太「そっか」

梨紗「悲しみや痛みを感じたかった。少しは楽になれるから。でもより孤独が強くなつた。私の上だけに雨が降っているようだ」

翔太「・・・菜月は俺のことを許してくれた。だけどこの先、心の底から喜べることって無いかもしれない。幸せを感じることもあつても、自分だけいいのかつて気持ちは一生付きまとうから」

梨紗「・・・」

翔太「それでも生きていくって決めた。菜月は俺のせいじゃないって言ってたけど、俺の言葉が引き金になったのは事実だと思う。これからはその報いとして、人を救える人間になる。これを俺の生きる意味にする。いつかまた、命を絶つことを考えるかもしれない。その時に同じ気持ちを持ってた人間がいれば、躓いても立ち上がれると思う。だから・・・生きていてほしい」

梨紗、翔太を見る。

翔太「簡単に生きるとか言えないのは分かつ

てる。でも他に言葉が見つからないから」
梨紗「・・・」

八神「死を考えてる人間からしたら暗闇の中を歩いているのと一緒にだ。先も見えねえし逃げるところも見つからない。でも死だけは、はつきりと見える。救うためには、光を射して死をぼやけさせ、新しい道を見つけさせる」

八神、翔太と梨紗の間に座る。

八神「俺は生きるなんて言葉は使わない。死にたい人間からしたら重荷でしかないからな。だけど、長い雨を歩き続けたやつと言葉なら、同じ言葉でも色が変わる。そいつなら、胸につつかえてるもんを外せるかもしれないねえな」

八神、立ち上がる。

八神「じゃあ帰るわ」

直樹「送って行きますよ」

八神「いいよ。行かなきゃなんねえ所があるだろ」

八神、真由美を見る。

○交差点（夜）

交差点を通過する赤い車。

献花の前に梨紗、真由美、直樹、翔太が傘を差し立っている。

真由美、腕に長羽織を掛け手には水晶。

翔太「ここです。菜月が亡くなったのは」

真由美「やっぱりそうか」

翔太、真由美を見る。

真由美「菜月ちゃんの前でここで自殺した人間がいる。その魂が菜月ちゃんを引っ張って行った」

献花の周りには黒い霧がかかっている。

直樹「魂の中には生きてる人間を死へと導こうとするものがあるんだ。しかもこの魂は霊師に見つからないように陰の気を最小限に留めてる。菜月ちゃんは、その魂に見つかってしまった」

翔太「・・・」

真由美「謝ろうと思っただって言っただでしよ？ 菜月ちゃんは死のうとはしてなかった。だから背負う必要はないよ」

翔太「そうだとしても背負っていきます。菜月の分まで生きないといけないので。それにもう1人じゃない。前よりは軽くなったから」

梨紗、翔太を見る。

翔太「じゃあ俺は歩いて帰ります。家すぐそこなので」

直樹「気をつけて」

翔太、梨紗を見る。

翔太「何か出来るわけじゃないけど、愚痴ぐらいは聞けるから」

梨紗「・・・うん」

翔太「それじゃあ」

翔太、去って行く。

真由美「回収するか」

○走る車内（夜）

運転席に直樹。助手席に真由美。

後部座席に梨紗。

真由美「梨紗のおかげで1人救われたね」

梨紗「私は何も・・・」

直樹「梨紗ちゃんが見つけたんだよ。翔太君のこと。だから変えることが出来た」

梨紗「救ったとしても、その先に何かあるのかな？」

真由美「道って色々な場所に繋がってるでしょ？無かったはずの道を交差させ、行けなかった場所へと導く。そしてその先に救われる命もある。たった1人かもしれないけど、その命が新しい命を繋げる。梨紗が作ったんだよ、その道を」

梨紗「・・・」

直樹「左手の小指には、出会いと変化って意味があるんだ。人を繋ぎ、変化を与え、命を結ぶ。それが生夢葵」

梨紗、左手の小指にある結びの印を見る。

○神谷家・玄関（朝）

梨紗、玄関の扉を開ける。

直樹の声「梨紗ちゃん」

振り向くと、ランチバックを持った直樹が駆け足で来る。

直樹「はい」

梨紗にランチバックを渡す。

梨紗「・・・ありがとう」

直樹「あと、弁当箱洗わなくていいからね」

梨紗「・・・うん」

直樹「じゃあ、行ってらっしゃい」

梨紗、玄関を出る。

○東女子高等学校・昇降口（朝）

梨紗、下駄箱の前に立っている。

下駄箱にはゴミが溢れている。

紙くずが下駄箱から落ち、それを見下ろす。

昇降口に樋口が入ってくる。

樋口、下駄箱のゴミに気づき

樋口「これ捨てとくね」

下駄箱のゴミを取り出す。

樋口「本当に暇だよね。もつと有効に時間使えばいいのに」

梨紗、樋口を見てる。

○同・廊下（朝）

梨紗と樋口、歩いている。

前から平田、中山、藤本が歩いて来る。

梨紗、下を向く。

藤本「あんたよく学校来れるよね」

中山「バカって鈍感だから傷つかないんだよ」

藤本「私もバカになりたい」

と、言っ去って行く3人。

樋口「あんなの気にしなくて・・・」

梨紗、教室に向かう。

梨紗M「傷口が浅く見えても、その深さは私にしか分からない」

樋口、梨紗の後姿を見ている。

○同・3年D組

昼休みの教室。

生徒たちが話していたりで騒がしい。

梨紗、弁当を持って教室を出ようとする
ると

中山の声「泉」

梨紗、中山の声に体が固まる。

中山と藤本、梨紗のもとにやって来る。

藤本の手にはノート。

藤本「見て」

と、ノートを広げると大量の消しカス。

藤本「泉の為に沢山作ったんだよ。今日はこのまま食べてよ」

梨紗「・・・出来ない」

藤本「は？」

中山「早く食べなよ」

梨紗、立ちすくむ。

平田、自分の席で梨紗たちを見ている。

藤本「じゃあ食べさせてあげる」

藤本、消しカスを掴む。

樋口の声「もうやめよう」

藤本が振り向くと樋口が立っている。

樋口「人のこと傷つけたら、自分たちが一番傷つくだけだよ。人は鏡だから、その行いは自分に返ってくる」

平田、樋口を見ている。

樋口「人の痛みなんて外からじゃ分からない。でも誰よりも傷ついてる。ただそれを見ようとしてないだけ。心に痛みが伴う傷は一生消えない。お願いだから、これで終わりにして」

藤本、ノートを床に投げる。

中山「偉そうに説教垂れないで。そういうの一番ムカつくから」

藤本、樋口の胸倉を掴む。

藤本「あんまり調子乗るなよ」

梨紗、藤本の腕を掴む。

梨紗「もうやめて」

藤本「お前らマジで・・・」

平田の声「藤本」

藤本が振り向くと平田がやって来る。

平田「樋口の言う通りだよ」

藤本、面を食らったように平田を見る。

平田、梨紗の前に立つ。

平田「今までやり過ぎた。もう泉をいじめたりはしない」

平田、教室を出て行く。

藤本「ちよつと平田」

藤本と中山、平田を追いかける。

樋口「大丈夫？」

梨紗、頷く。

○同・昇降口

多くの生徒が下校してる。

梨紗、靴を履き替えてる。

樋口の声「泉さん」

振り返ると樋口。

樋口「一緒に帰らない？」

○駅までの道

梨紗と樋口、歩いている。

梨紗、財布から千円を取り出し

梨紗「これ」

樋口「泉さんに貸したんじゃないから」

梨紗「でも・・・」

樋口「大丈夫」

梨紗「・・・」

樋口「ごめんね、もっと早く行けなくて」

梨紗「・・・ありがとう」

樋口「うん」

樋口、梨紗を見て微笑む。

梨紗、照れくさそうに下を向く。

樋口「良い天気だね」

梨紗、空を見上げると雲一つない空。

梨紗M「太陽なんて見れないと思ってた」

樋口の顔を見ると嬉しそうな表情。

梨紗M「晴れた空はこんなにも綺麗で、私が

知らない色を教えてくれた」

○神谷家・居間

直樹、洗濯物を畳んでおり、真由美は雑誌を読んでいる。

テレビには再放送のドラマが映ってる。

梨紗、居間に入って来る。

直樹「おかえり」

梨紗「ただいま」

真由美「晩御飯作るの面倒くさいから、食べに行かない？」

直樹「いつも作ってるの僕なんですけど」

真由美「こないだ作ったじゃん」

直樹「レトルトでしょ」

真由美「愛情込めて電子レンジ入れたから」

直樹「その愛情届いてないです」

梨紗、テレビに視線をやると優花が映っている。

するとブレザーのポケットが光り出す。

ポケットから紫の水晶を取り出すと紫

の光を帯びてる。

真由美と直樹、水晶を見る。

梨紗、水晶を握る。

直樹「大丈夫？」

梨紗、頷く。

真由美と直樹、梨紗の拳に手を置く。

梨紗、目を閉じる。

○回想・タワマン・優花の部屋・リビング（夜）

部屋の時計が20時17分と表示。

テーブルの上には薬の瓶が複数。

優花の手には大量の錠剤。

錠剤を口元に運ぶ。

○神谷家・居間

梨紗、目を開ける。

真由美と直樹、テレビを見てる。

そこにはドラマに出てる優花。

直樹「ですよね」

真由美「うん」

梨紗、テレビに映る優花を見てる。

○撮影スタジオ・控室

優花、彩、橋本が座っている。

橋本、雑誌を読んでいる。

雑誌の表紙に「好感度ランキング」と書いてある。

入口にA Dが立っている。

A D「じゃあ出番きましたら呼びに来ますね」

優花「はい」

A Dが控室を出る。

橋本「好感度5位なんだ」

優花「たまたまです」

橋本「いいよな女は。ヘラヘラ笑って、はい言ったりや、勝手に好感度付くから」

優花「そうですね・・・」

彩「どう思おうが自由だけどさ、わざわざ本人に言う必要がある？」

橋本「お前はネットでボロクソ言われてるものな。もう少し愛嬌身につけろよ」

彩「あんたみたいに薄汚れた面隠して良い人ぶるくらいなら、嫌われてもいいから私は私でいる」

橋本、立ち上がり

橋本「もう一遍言ってみろよクソ女」

彩「品性って言葉に出るね」

橋本「てめえな」

優花「やめよう。これ以上は何も良いことないし、スタッフの人も来ちゃうから」

橋本「こういう奴が現場いると、ほんとテンション下がるわ」

と言い、控室を出て行こうとする。

橋本、ドアの前で立ち止まり振り返る。

橋本「お前もいつも笑っててムカつくんだよ。

なんも考えてねえんだろ。いいよな、悩みがない奴は」

彩「あんたね」

優花「彩ちゃん」

橋本、控室を出る。

彩「後で、ちゃんと言っとくから」

優花「大丈夫・大丈夫だから」

彩、優花を見てる。

○同・正面玄関（夕）

優花と菊池、傘を差して出てくる。

優花、帽子を被ってる。

優花「今日はバスで帰ります」

菊池「明日は14時入りだから」

優花「はい、お疲れ様です」

菊池、去って行く。

優花、歩き出そうとすると

彩の声「優花ちゃん」

振り向くと彩が傘を差し走って来る。

彩「もう少しで終わるから一緒に帰らない？」

優花「ごめん、今日は1人で帰りたい」

彩「・・・分かった。また明日ね」

優花「・・・うん」

優花、去って行く。

彩、優花の後ろ姿を見てる。

○走るバスの中（夜）

優花、雨に打たれる景色を窓から眺めている。

バスが停車し女子高生2人が乗車。

優花、帽子を深く被る。

女子高生が優花の前に座るとバスが発車する。

女子高生A「神原優花って性格悪いらしいよ」

優花、女子高生を見る。

女子高生B「マジ？」

女子高生A「ネットの記事に書いてあった」

女子高生B「最悪じゃん。それ聞いたら嫌いになりそう」

優花、俯く。

○歩道橋（夜）

優花、傘を差して歩いていると電話がかかってくる。

画面を見ると「母」と表示されている。出るのを躊躇うが通話ボタンを押す。

優花「もしもし」

母の声「テレビ見たばい」

優花「うん」

母の声「近所の人に自慢してもうた。うちん子がドラマ出とーって」

優花「恥ずかしかけんやめんしやい」

母の声「あげん内気な子が芸能人か、最初はすごか心配しとったんやけん。ばってん、テレビで笑いよー顔見よったら楽しそうで良かった」

優花「・・・」

母の声「芸能人て大変なんやろ？嫌な人とかおらん？」

優花、涙を流す。

母の声「優花？」

優花「大丈夫。良い人ばかりやけん」

母の声「それ聞いて安心した」

優花「新しかドラマも決まったし、応援してくるー人もおる。良か友達も出来た」

母の声「そっか、優花は自慢ん娘ばい」

優花「・・・お母しやん」

母の声「何？」

優花「ありがとう」

母の声「どげんした急に」

優花「言いたかっただけ」

母の声「体には気ばっけんしやい」

優花「ちゃんとやれとーけん、大丈夫。じゃ

あもう切るね」

母の声「もう少ししよかやろう？」

優花「これから撮影やけん」

母の声「そっか、頑張りんしやい」

優花「うん、おやすみ」

電話を切ると、堪えていた涙が溢れる

ように流れ落ちる。

優花「ごめん、お母さん」

○神谷家・居間（夜）

居間には梨紗、真由美、直樹。

梨紗の手には紫の光を帯びた水晶。

梨紗「何で何も起きないの？」

直樹「タイミングが大事だから」

梨紗、直樹を見る。

直樹「大半は知らない人の死を止めなきやい

けない。でもいきなり行って死んじゃダメ
って言われても、気持ちを变えることは難
しいでしょ？だからどのタイミングで手を
差し伸べられるかが重要なんだ」

真由美「水晶が一番いいタイミングで導いて
くれる。それまで待とう」

梨紗「・・・うん」

すると水晶が浮かび上がる。

直樹「来た」

浮かび上がった水晶が吸い込まれるよ
うに消える。

直樹「水晶の気は感じる？」

梨紗、頷く。

○走る車内（夜）

運転席に直樹。助手席に真由美。

後部座席には梨紗。

梨紗「そこを左」

車が左折するとタワーマンが見える。

梨紗「多分あのマンション」

真由美と直樹、タワマンを見る。

○タワマン・正面玄関くエントランス（夜）

彩、インターホンの前に立っている。

部屋番を押すが応答が無い。

スマホでLINEを開く。

画面には未読の「家行っている？」

その下には3件の不在着信が表記。

スマホを見てるとエントランスから住

人が出て来て自動ドアが開く。

彩、中に入ると後ろから直樹、梨紗、

真由美が入って来る。

直樹の手には麻の念珠袋。

直樹「あっ、開いてる」

駆け足でエントランスに入る3人。

直樹「あと5分ですよ」

真由美「何でこんなギリギリなのよ」

彩を追い抜きエレベーターのボタンを押す。

扉が開くと3人が入って行く。

梨紗 「何階か分からない」

そこに彩が入って来て最上階を押す。

彩 「何階ですか？」

直樹、彩の顔を見てる。

直樹 「同じです」

エレベーターが閉まり上に上がる。

○同・エレベーター（夜）

中には梨紗、真由美、直樹、彩。

直樹、彩を見ると目が合う。

彩、視線を逸らす。

直樹 「稲葉彩さんですよ？」

彩、顔を伏せる。

真由美 「知り合い？」

直樹 「神原優花と一緒にドラマ出てますよ」

真由美、彩を見る。

真由美 「ねえ・・・」

彩、真由美を見る。

○同・優花の部屋・リビング（夜）

テーブルには薬の瓶が複数。

優花、薬の瓶を手に取る。

部屋の時計は20時14分。

○同・最上階通路（夜）

エレベーターが開き、直樹、梨紗が出てくる。

直樹「梨紗ちゃん、どこの部屋か分かる？」

梨紗「あっち」

直樹と梨紗、駆け足で向かう。

彩と真由美、エレベーターから出てくる。

彩「どういうことですか？優花ちゃんが死ぬとしてるって？」

真由美「それを止めるために来たの。私たちが運命を変える。あなたはその先の道を造ってあげて」

彩、真由美を見てる。

○同・最上階通路・優花の部屋の前（夜）

梨紗と直樹、走って来る。

梨紗「ここ」

優花の部屋の前で立ち止まる。

梨紗「どうするの？」

直樹、念珠袋から護符を取り出し人差し指と中指で挟む。

直樹「護符よ、命絶つ者を救うため力を貸したまえ。鉄の錠を外し、その魂を肉体に繋ぎとめよう。解（かい）」

「カチャッ」と開錠する音。

○同・優花の部屋・リビング（夜）

部屋の時計が20時16分と表示。

優花、手のひらの錠剤を口に運ぶ。

すると、目の前に紫の光を帯びた水晶が現れる。

驚いた様子で水晶を見てみると、玄関の方から足音が聞こえてくる。

リビングの扉が開き直樹と梨紗が入って来る。

直樹、優花の持つてる薬を見て急いで
優花の手を掴む。

大量の錠剤が床に散らばる。

直樹「間に合った」

優花、驚いた様子で直樹を見てる。

紫の光を帯びた水晶が梨紗の前に現れる。

水晶の下に手を置くと光が消え、梨紗の手の中に落ちる。

そこに彩と真由美が来る。

彩、床に散らばった錠剤を見る。

優花「彩ちゃん」

部屋の時計が20時16分から17に
変わる。

○走る車内（夜）

運転席に直樹。助手席に真由美。

後部座席には梨紗、優花、彩。

真由美「今日はうちに泊まってもらおう。そのままに出来ないから」

俯いてる優花を彩が見てる。

○神谷家・居間（夜）

居間に梨紗、真由美、直樹、優花、彩。

優花、精気を失ったように俯いている。

真由美「ねえ、もしよかったら聞かせて。何で死を選ぼうとしたか」

優花「・・・ずっと周りの顔ばかり見て生きて来たんです。そんな自分が嫌いでした。女優になれば違う自分になれる。そしたら少しは変われるかなって・・・でも変われなかった。私たちってイメージで全てが決まるんです。嫌なことがあっても嘘の笑顔作って、どれだけ苦しくても、その仮面が傷を隠す」

彩、優花を見てる。

優花「芸能人で逃げる場所がないんです。外では知らない人に写真を撮られ、ありもしない噂で他人が私を作り上げる。家に居ても自分がどう思われてるか気になって、見なければいいのに、どうなるか分かってる

のに、それでも傷をつけに行ってしまう。
声を上げて傷が増えるだけ。私たちは商
品だから、傷がつけば新しいもの変わる
だけ」

彩「・・・」

真由美「誹謗中傷ってさ、一生無くならない
んだと思う。もしそれで傷ついて命を絶つ
たとしても、傷をつけて良い理由を探す。
あいつが悪い、芸能人だから、なら辞めれ
ばいい。それで自分のやったことを正当化
して罪悪感が消えていく。同じことを繰り返
返していけば、善悪の分別も分からなくな
る。傷をつける痛みを知らない限り、人は
人を傷つける」

優花「・・・」

真由美「芸能人てさ、自分は商品だって言う
けど、嫌いなんだよね、その言葉」

優花、真由美を見る。

真由美「あなたには感情があって、言葉も発
せられる。人と物は違う。自分で自分の価

値下げなくていいよ」

優花「・・・ずっと苦しかった。良い人でない
いとして。だから嫌われないように生きて
来たんです。いつからだろう、周りの言葉
で自分の価値を測るようになったのは」

直樹「価値観なんて人それぞれ違う。それに
耳を傾けてたら自分が分からなくなる。大
切なのは自分が何をしたいのか見つけるこ
と。それが生きる支えになるから。自分の
ためでもいいし、人のためでもいい。でも
幅広い価値観を持って。狭い価値観は人を
測るようになる。多くのものを見ることに
出来れば、きつと見つかるから。生きてい
く理由が」

優花「・・・はい」

○同・客間（夜）

布団が2つ敷いてあり、外の明かりが
部屋を照らす。

優花、雨の降る空を窓から見ている。

そこに彩が入って来る。

彩「まだ起きてたんだ」

彩、優花の隣に来る。

優花「雨、止むかな」

彩「止むよ、きっと」

優花と彩、窓の外を見ている。

○同・居間（朝）

梨紗、真由美、直樹が食卓を囲む。

テーブルには朝食が並んでいる。

そこに優花と彩が入って来る。

直樹「おはよう」

優花・彩「おはようございます」

直樹「食べて」

優花「いただきます」

優花と彩、座る。

真由美「晴れたね」

直樹「そうですね」

優花、外を見ると庭の紫陽花に気づく。

真由美「紫陽花の花言葉って知ってる？」

優花「分からないです」

真由美「色が変わったたり、雨に晒されて耐え忍んで咲いてるから、冷淡、移り気、無情って言葉がついてるの。こんな綺麗な花なのに、イメージだけで悪い言葉を付けられる。どんな花だって、美しく咲こうとするのにな」

優花、紫陽花を見てる。

○同・玄関・中（朝）

玄関には優花と彩。

向かいに直樹、真由美、梨紗。

優花「お世話になりました」

真由美「今日ぐらい休めばいいのに」

優花「迷惑かけちゃうので」

真由美「好きな時に遊びに来て。雨が降ったらここで雨宿りしていけばいい」

優花「（笑顔で）はい」

彩、優花を見て微笑む。

直樹「じゃあまたね」

優花「ありがとうございます」

優花と彩、会釈して玄関を出る。

梨紗、玄関の方を見てる。

真由美、梨紗の頭をクシャクシャつと

撫でて居間に戻って行く。

直樹「お弁当、テーブルに置いてある」

梨紗「うん」

梨紗と直樹も居間に戻る。

○住宅街（朝）

優花と彩、歩いている。

彩「ごめん、何も出来なくて」

優花「ううん、来てくれてありがとう。彩ち

やんの顔見たらホツとした。ただ居てくれるだけでいい」

彩、立ち止まる。

彩「・・・芸能人が亡くなったら、優しい言葉をかけてもらえるでしょ？もし生きてるうちにその言葉が聞けたら、救えた命もあったのかな」

優花「どんな綺麗な言葉を並べても、たった
1つの言葉で色褪せていく。美しく咲くこ
とは難しいけど、枯らすのは簡単だから。
でも変われるって信じたい。変わった自分
を見せれば、誰かを救うきっかけになるか
ら。私はそんな女優になりたい」

彩「なろう。そんな女優に」
優花「うん」

○東女子高等学校・昇降口（朝）

梨紗、下駄箱の前に立っている。
息を整え下駄箱の扉を開く。
中には上履きだけが入っており、安堵
の表情を浮かべる。
靴を履き替え教室に向かう。
別の扉が開き、紙くずが落ちる。

○同・3年D組（朝）

梨紗が教室に入って来ると、席の前で
立っている樋口の後姿が目に入る。

梨紗、鞆から折り畳み傘を取り出し、
樋口のもとに行く。

梨紗「これ、ありがと・・・」

樋口の机を見ると菊が置かれている。

梨紗「・・・」

後ろから平田、中山、藤本。

中山「え？生きてたの？」

藤本「死ねばいいのに」

樋口、俯いてる。

平田「良かったね泉。これからは平穩に暮らせるよ」

平田、席に戻ろうとすると、梨紗に腕を掴まれる。

平田「何？」

樋口、教室を出る。

平田「追っかけてあげれば。あなたの身代わりみたいなもんでしょ」

梨紗、教室を出る。

○同・廊下（朝）

梨紗、教室から出てくる。
周りを見渡すが樋口の姿は見えない。

○同・科学室

生徒たちがそれぞれの席で、顕微鏡を
見ている。

平田、中山、藤本、楽しそうに話して
いる。

梨紗が平田たちを見ていると、樋口が
入って来る。

教師 B 「樋口、どうした？」

樋口 「具合が悪くて保健室に居ました」

教師 B 「無理しなくていいぞ」

樋口 「大丈夫です」

樋口が席に着くのを平田が見ている。
科学室の扉が開くと、教師 C が入って
来る。

教師 B 「どうしました？」

教師 C 「先生のクラスの子が怪我しちゃって」

教師 B 「分かりました。ちよつと出るから、

そのまま観察してて」

教師 B と教師 C 、出て行く。

樋口、憂鬱そうに座っていると、中山と藤本が来て、樋口を抑え込む。

樋口「やめて」

生徒たちが樋口を見る。

そこに、水の入ったビーカーを持った

平田が来る。

平田「喉乾いたでしょ？」

樋口「お願い、やめて」

薄ら笑いを浮かべ、樋口の頭に水をかけようとすると

梨紗の声「ダメ」

梨紗が平田からビーカーを奪う。

梨紗「こんなの間違って・・・」

平田、梨紗の頭を思いつき叩く。

梨紗「・・・」

平田「指図しないで、気持ち悪いんだけど。」

それ樋口にかけて」

梨紗、平田を見る。

平田「ねえ、早く」

梨紗「・・・」

樋口、梨紗を見ている。

平田「聞こえてる？」

梨紗「出来な・・・」

平田、梨紗の頭を叩く。

平田「やって」

梨紗、怯えた様子。

平田「早くかけろって言ってるんだよ！」

平田、手を振り上げる。

梨紗、振り上げた手に反応して樋口に

水をかけてしまう。

樋口の頭がびしょ濡れになる。

平田「せっかく助けてくれたのに。あんた最

低だね」

平田、中山、藤本、席に戻る。

静まり返る教室、樋口が立ち上がる。

梨紗「ごめ・・・」

樋口、無言のまま出て行く。

梨紗、立ちすくむ。

○同・校門

樋口、校門から出てくる。

その後ろから、梨紗が走って来る。

梨紗「樋口さん」

樋口、立ち止まる。

梨紗「ほんとにごめん。私・・・」

樋口「分かっている。だからもういい」

樋口、去って行く。

梨紗、樋口の後ろ姿を見てる。

○住宅街

梨紗、歩いている。

すると突然の雨。

梨紗M「止まない雨はない。確かにそうかも
しれない。でも、雨は何度だって降る」

梨紗、立ち止まり空を見上げる。

梨紗M「施された束の間の安息は、再び雲に
覆われた。崩れ行くなら、空の青さなんて
知らなければ良かった」

空は曇り空で覆われている。

○神谷家・居間

直樹、洗濯物を畳んでいると真由美が居間に入って来る。

外を見ると雨が降っている。

真由美「えっ、雨降ってんじゃない」

直樹「急に振り出したんですよ」

真由美「ほんと雨って自分勝手。ねえ、買い物行くけど何かいる？」

直樹「大丈夫です」

真由美「じゃあ行ってくんね」

直樹「はい」

真由美、居間を出る。

○同・玄関・外

真由美、傘を持って出てくると、ずぶ

濡れの梨紗が歩いて来る。

真由美「どうしたの？」

真由美、梨紗に傘を差す。

真由美「梨紗？」

梨紗「強くなりたい。自分を守るためじゃない、誰かを守れるように」

真由美、梨紗を見ている。

梨紗「でも怖い。嫌だっけはつきり言えばいいのにそんな勇氣も無い。そのうえ逃げたいとも思ってる。どうしてこんなに弱いんだろう。変わりたい・・変わりたいよ」

真由美、梨紗を抱きしめる。

真由美「人ってそんなに強くないよ」

梨紗、真由美の胸の中で涙を流し、嗚咽を漏らす。

梨紗M「人のぬくもりを感じた。不安と安心が重なり合う、まるで白と黒が混ざり合った感情に、空を知らない雨が頬を伝った」

○同・縁側

梨紗と真由美、縁側に座っている。

梨紗はTシャツ姿で頭にはタオル。

真由美「そっか、助けてくれた人裏切っちゃ

ったんだ」

梨紗「やらないって選択も出来た。でも自分を守る為に彼女を傷つけた」

真由美「人って誰かを傷つけた時、言い訳したり、嘘をつく。受け止めたら罪悪感に駆られて苦しむから。生きてれば傷つけられることも、傷つけることもある。大事なものは傷をつけてしまった後」

梨紗、真由美を見る。

真由美「相手は一生消えない傷を背負って生きていく。だから傷を負わせた側も一生それを背負って生きる。その上で、自分の周りにいる大切な人、新しく出会う人達に優しくする。降り続く雨を止ますことは出来なくても、傘を差すことは出来るでしょ？」

梨紗「・・・うん」

真由美「人を守るって簡単に出来ることじゃない。でも寄り添うだけでも支えにはなる。

梨紗が出来るやり方でいいんだよ」

梨紗、外を見ている。

○東女子高等学校・体育館

生徒たちがバレーをしている。

教師D「集まれ」

生徒たちが集まる。

教師D「来週は試合をするからな。片付けてから教室に戻るように」

教師D、体育館を出て行く。

生徒たちが片づけを始める。

梨紗、ボールを籠に入れようとする

平田の声「樋口にやらせればいいよ」

生徒たちが平田を見る。

平田「手伝ったらそいつみたいになるから」

樋口、俯く。

平田、中山、藤本、去って行く。

生徒E「ごめんね」

と、樋口にボールを渡し、生徒たちが体育館を出て行く。

樋口、ボールを籠の中に入れて、梨紗も片づけを手伝い始める。

樋口「いいよ、やらなくて」

梨紗、ボールを拾っている。

樋口「またやられるよ」

梨紗、黙々と片づけをする。

樋口、梨紗を見てる。

○同・3年D組

チャイムが鳴り生徒たちが席に着く。

梨紗、教室に入ってくる。

黒板を見ると「気持ち悪い樋口さん。

どうか死んでください。みんなそう思

ってます」と書かれている。

そこに樋口が入って来て黒板を見る。

樋口「・・・」

平田、中山、藤本、笑っている。

梨紗、黒板消しを取ると木下（35）

が入って来る。

木下「早く座れ」

木下、黒板を見る。

木下「それ消しとけよ」

梨紗、木下を見る。

木下「教科書の38ページ開いて」

樋口、黒板の文字を消し始める。

梨紗も樋口と一緒に文字を消す。

○同・職員室前

木下、職員室に入ろうとすると

梨紗の声「先生」

と梨紗が来る。

梨紗「樋口さんのことで・・・」

木下「待て、こっちで話そう」

○同・応接室

梨紗と木下、向かい合って座っている。

梨紗「先生から平田さんたちに言ってほしいんです。このままじゃ樋口さんが・・・」

木下「原因があるからいじめられるんだろ。」

樋口に問題があるんじゃないか？」

梨紗「私を助けたからいじめられたんです。」

樋口さんに原因なんて無い」

木下「・・・こっちも大変なんだよ。残業ばかりで土日は部活。ろくな休みも無い。そのうえ保護者はちよつとしたことで出てくる。それで30人、40人も見られるわけないだろ。自分たちで何とかしてくれ。生徒を助けても評価はされないんだよ」

梨紗、立ち上がり

梨紗「他の先生に頼みます」

木下「他の教師に言ったところで何も変わらない。いじめがあると評価が下がる。学校って言う場所はない、いじめてる奴よりも、いじめられてる奴の方が邪魔なんだよ」

梨紗、木下を睨み出て行く。

○同・校門

梨紗、俯きながら出てくる。

真由美の声「梨紗」

前を見ると真由美と直樹。

梨紗「どうしたの？」

真由美「いじめてる奴ぶつ飛ばしに来た」

直樹「違うでしょ。担任の先生に言おうと思
って」

梨紗「今、言ってきた」

直樹「どうだった？」

梨紗、首を横に振る。

真由美「私が行ってくる」

真由美、校舎に向かおうとするが梨紗
に腕を掴まれる。

梨紗「学校には頼らない」

真由美、梨紗を見る。

○ファミレス

梨紗、真由美、直樹、座っている。

真由美「最低だね、その教師」

直樹「学校って成果主義ですもんね。書面の
数字で評価が決まるから、いじめがあつて
も0って報告する」

真由美「汚い部屋の掃除と一緒にじゃん。余計
なものはクローゼットに押し込んで、綺麗
になりました、すごいですねってことでし

よ？見えなくしただけじゃん」

直樹「確かに」

梨紗「学校の制度なんてどうだっていい。樋

口さんを助けたい」

直樹「多くの人に声を届けることが出来たら
変わるかもしれない」

梨紗、考え込む。

直樹「そうだ。週刊誌に言ったらどうですか？
扱ってくれるかも」

真由美「ダメ。あいつら儲かることしかやら
ないから。子供の声より、不倫相手の声を
聞くから」

梨紗、考え込んでる。

○神谷家・居間（夕）

真由美、直樹、梨紗が入って来ると、
神谷司（30）がお茶を飲んで座って
いる。

真由美「司、帰って来てたの？」

司「さつき帰ってきました」

司、梨紗を見る。

真由美「泉梨紗。生夢葵だよ」

司「初めまして。泉さん」

梨紗、会釈する。

直樹「この人は霊導師の司さん。魂を霊界に導く人。優秀な霊導師は除霊やその人の前世が見える。司さんはその界限では有名な人で、全国から依頼が来るんだ」

真由美「私も直樹も司に教えてもらったの。

霊師の力が備わってるって。だからここに来た」

梨紗、司を見る。

司「まあ座って下さい」

一同、テーブルを囲む。

司「水晶を見せてもらってもいいですか？」

梨紗、ポケットから紫の水晶を出し、

司に渡す。

司「ラベンダーアメジストですね。生夢葵の水晶の色は人によって変わるんです。この色はアメジストが長い年月紫外線に晒され

て薄くなったもの。綺麗でしょ？色褪せても」

梨紗、水晶を見る。

司「泉さん、前世を見てもいいですか？」

梨紗、司を見る。

直樹「水晶を通して見ることが出来る。1度見てもらったら？」

梨紗「・・・(頷く)」

司が水晶を握り目を閉じると、部屋に静けさが覆う。

梨紗、不安げに司を見ている。

程なくして、司の目がゆっくりと開く。

司「今まで多くの人を見てきました。同じ苦悩でも人によってその大きさは変わります。魂の器がそれぞれ違うから。自殺した魂が弱くなるのは聞きました？」

梨紗が頷く。

司「泉さんは前世で自死しています」

梨紗、司を見る。

司「だからその器も小さくなっています。ここ

まで生きていたのが不思議なくらい。でも魂を強くすることは出来る。直樹さん、回収した魂はありますか？」

直樹「はい」

司「これから魂を霊界に送ります」

梨紗、司を見る。

○寺・本堂（夜）

護摩壇の上に3つの水晶を乗せた三方。

礼盤に司が座っている。

その後ろに梨紗、真由美、直樹、八神。

司「じゃあ始めますね」

と言い、左手の人差し指と中指を上げて、胸の前に置く。

司「納師より授かりし魂、天昇の儀（てんし
よしのぎ）により霊界へと引き渡す。導く
は靈導の師。背負いし煩悶を祓い清めよう」

水晶から白い煙状のものが昇っていく。

司「諸行無常。悲しき呪縛の螺旋はいずれ種
となり蕾に変わる。来世に繋げしその魂が

翠雨により鮮やかに彩ることを祈ろう」

梨紗、昇っていく魂を見てる。

○同・客間（夜）

梨紗、真由美、直樹、八神、司が食卓を囲む。テーブルには特上寿司。

八神「何で特上頼んだよ」

真由美「ケチケチすんな」

八神「後で返せよ」

真由美「うるせえ、髪切って来い」

八神「うちの宗派はいいんだよ」

司「泉さん、死を考えてる人を救うには、何が大切か分かりますか？」

梨紗、少し考え首を横に振る。

司「誰かを救っても、その先でまた躓いて死を選んだら意味がありません。大事なものは雨が止むまで待てる忍耐力より、雨の中でも歩き続ける強さを持たせることです」

梨紗「・・・」

司「自死がよぎると、いくつも選択肢はある

のに死に近づく道を選んでしまえます。避けるためには、その人の中にすがれるものを作る。それが持てれば道となります。たとえ躓いても自分の足で立ち上がり歩いて行ける。私たちがすべきことは、そのきっかけを作ることです。そうすれば、見えなかったものが見えるようになる」

梨紗「見えるようになったら、強さを持てる？」

真由美「もう持つてるよ」

梨紗、真由美を見る。

真由美「助けてくれた人を裏切ったって言うたでしょ？その状況なら自分は悪くないって言えた。でも梨紗はしなかった。そして変わろうとまで思った。それが強さだよ」

直樹「梨紗ちゃんは優しい。でもその優しさが時に自分を苦しめてしまう。背負わなくていいものも背負ってしまうから」

司「自ら命を絶った人間は、来世でも死を選びやすい。死の螺旋から降りるには、ただ生きる。それだけで十分なんです」

梨紗「・・・」

八神「裏切ったって言ってたな？人を傷つけた時にはルールが・・・」

真由美「それ私が言った」

八神「俺がお前に言ったやつだろ。勝手にパクんな」

真由美「パクリじゃない。サンプリング」

八神「音源みたいに言うな」

真由美「雨という名のBGMが、私の言葉をリリックに変える」

八神「黙れ。つーかお前に貸したCD返せよ」

真由美「京介は優しい。でもその優しさが時に自分を苦しめてしまう。貸りたCDを無くしても、許してしまうんだから」

八神「許さねーよ」

直樹「僕の言葉で遊ばないでくれますか？」

八神「買って返せよ」

真由美「そのうちな」

八神「絶対返さねーだろ」

真由美「10倍にして返してやるよ」

八神「言ったな。あれ三千円だから三万にして返せよ」

真由美「こんなでつかいCDで返す」

八神「大ききじゃねーよ」

梨紗「フフ」

一同、梨紗を見る。

八神「まあいいや、今回は目を瞑ってやるよ」

真由美「強くなったな、京介」

八神「やっぱり返せ」

真由美「やーだ」

八神「可愛くねーぞ」

真由美「おい、一回表出る」

真由美と八神、言い争っている。

直樹と司、笑いながら見ている。

梨紗M「誰の記憶にも残らず静かに消え去りたかった。でも周りの人間や生きる場所では変わっていく。美しく染まる紫陽花のように」

○神谷家・玄関（朝）

梨紗、玄関を開けようとする。直樹が来る。

直樹「梨紗ちゃん、今日真由美さんと学校に行く。先生に言ってみるよ。何か変わるかもしれないし」

梨紗「・・・分かった」

直樹「行ってらっしゃい」

梨紗「行ってきます」

梨紗、玄関を出る。

○東女子高等学校・校庭（朝）

樋口、歩いている。

すると後ろから藤本が来て、鞆を奪い遠くに投げる。

藤本「めっちゃ飛んだ」

平田と中山が来る。

中山「飛ばすなよ」

平田たちが笑いながら去って行く。
樋口、鞆を拾おうとすると雨が降って来る。

鞆を見つめる樋口。

すると傘が差される。

振り向くと傘を差した梨紗。

梨紗「いつかこの雨が止んで、笑える日が来る。あなたが私を救ってくれたように、私もあなたを救ってみせる」

樋口から借りた傘を返して去っていく。

樋口、梨紗の後ろ姿を見てる。

○同・体育館

全校生徒が並んでおり、脇には教師。

生徒たちが話していたりで騒がしい。

藤本「コンビニ行かね」

中山「金無い」

平田「いるじゃん」

平田、前に並んでいる樋口を見る。

藤本、樋口のもとに行く。

藤本「樋口、財布持ってる？」

梨紗、後ろを向き藤本を見る。

樋口「・・・あるけど」

藤本「コンビニ行くぞ」

樋口「もうすぐ始まるし・・・」

藤本「うるせーな、行くぞ」

平田、中山、藤本、体育館を出て行くところ。
うとする。

その後ろに樋口。

梨紗、後を追いかけて平田の前に出る。

平田「何？」

梨紗「行かせない」

樋口、梨紗を見る。

平田「どけよ」

平田、梨紗を押しつける。

梨紗、再び平田の前に立つ。

平田「何なんだよ！」

全校生徒が梨紗たちを見る。

梨紗「何で人の痛みが分からないの。傷をつけられた人間は過去を背負って生きなければいけない。どれだけ時間が過ぎても、その過去に縛られて置き去りにされる」

そこに木下や他の教師が集まって来る。

木下「何やってるお前ら。戻れ」

梨紗、木下を見る。

梨紗「評価が大事なのは分かる。でも子供は数字じゃない。たった3年かもしれないけど、そこで付いた傷は一生消えない。いじめが無い学校はすごいと思う。でもいじめがあっても、それを無くすのも良い学校なんじゃないの？」

木下、狼狽える。

梨紗、再び平田を見る。

梨紗「人って簡単に死ぬんだよ。言葉1つで生かすことも殺すことも出来る。毎日死にたいって思いながら生きて、どこにも居場所が無くて、理解してくれる人もいなかった。でもそんな私を救ってくれた。命の重さなんて私には分からないけど、奪っていいものではない。死にたいって思ってる人間も、初めからそう思って生まれてきたわけじゃない。苦しみを忘れさせてくれる場所があれば生きていたい」

樋口、梨紗を見ている。

梨紗「平等に見るとは言わない。お気に入り
の生徒がいても構わない。だけど、傷つい
た生徒は守ってあげてほしい。それで救わ
れる命があるなら」

梨紗、体育館から出て行く。

校長「木下先生。どういうことですか？」

木下「いや・何ですかね？」

樋口、梨紗の後ろ姿を見てる。

○同・校庭

真由美と直樹、歩いて来る。

直樹「キレイないで下さいね」

真由美「そんなことしないよ」

直樹「ほんとかな」

昇降口から梨紗が出てくる。

直樹「梨紗ちゃんだ」

真由美「梨紗」

梨紗、真由美たちを見る。

樋口、昇降口から出てくる。

樋口「泉さん・・」

樋口、真由美たちを見る。

○名月院・参道

紫陽花に囲まれた参道を梨紗と樋口が歩いている。

後ろには真由美と直樹。

樋口「私も中学の時、いじめられてたの」

梨紗、樋口を見る。

樋口「弱い自分をこの世界から消し去りたかった。だから私を知ってる人がいない場所を選んだ。そこだったら変われると思ったから。でも中々変われなかった。ずっと誰かの1番になりたかったの。孤独の中で生きてる人に寄り添って、1人じゃないよ、私も同じだよって。泣いたらそっと抱きしめてあげたかった。私がそうされたかったように、誰かに必要とされたかった」

樋口、立ち止まる。

樋口「難しいね、人の為に何かをするって。」

頑張れば頑張るほど、思い描いてたものから離れて行く」

梨紗「私は樋口さんのおかげで救われた。痛みを伴うことを知っても、私に寄り添ってくれたでしょ。だから別の一步が踏み出せた。あの時傘を差してくれたこと、一生忘れない」

樋口「私も」

樋口、紫陽花を見る。

樋口「紫陽花って凄いいね。ずっと雨に打たれてるのに枯れずに綺麗に咲く。こんな花みたいに生まれたかった」

真由美「綺麗なものを見続けている人間に本当の美しさは分からない。傷を負って痛みを知り、その中で強さと優しさを学ぶ。多くの人は心が折れて枯れていく。でもその先には、幾多の色を纏った鮮やかな世界が待っている。本当に美しい花は、長い雨の中で咲き誇る」

樋口「だから綺麗なんだ」

梨紗、紫陽花を見てる。

○東女子高等学校・外観

T「一カ月後」

○同・3年D組

生徒たちが授業を受けている。

梨紗、ノートを取っている。

梨紗N「生徒たちからの証言もあり、いじめが発覚した。担任の木下は事実を隠していたとして停職処分となった」

梨紗、平田たちの席を見ると姿がない。

梨紗「あの3人はその後・・・」

○同・体育館

生徒たちがバスケの試合をしている。

梨紗、端で見ている。

隣の生徒A、Bがスマホを見ている。

生徒A「平田たち顔写真まで出てる」

生徒B「マジ？」

生徒B、スマホを覗く。

スマホには平田、中山、藤本の顔写真が映っているツイッター。

#東女子高 #いじめ首謀者 #暴力・傷害 #犯罪者とハッシュタグが付いてる。

生徒A「終わったねあいつら」

生徒B「自業自得でしょ」

○平田家・平田の部屋

カーテンが閉められた薄暗い部屋。

平田、ベッドで横になっている。

スマホが鳴り、画面を見ると非通知。

壁にスマホを投げ、頭を抱える。

梨紗N「顔や名前、電話番号を晒され、彼女たちが与えていたものが重くのしかかっていた」

○東女子高等学校・校庭

下校中の生徒たちが傘を差している。

梨紗、昇降口から傘を差し出してくる。

樋口の声「梨紗ちゃん」

前から樋口が走って来る。

樋口「映画行くんだけど一緒に観ない？」

梨紗、樋口の後ろにいる生徒Eを見る。

梨紗「・・・今日は予定があるから」

樋口「そっか、でも今度一緒に行こうね」

梨紗「うん」

樋口「じゃあまた明日」

樋口、走って戻って行く。

樋口を見ると楽しそうに生徒Eと話している。

○住宅街

梨紗、傘を差して歩いている。

前から車が来て、梨紗の前で止まる。

窓が開くと中には真由美と直樹。

直樹「これから梨紗ちゃんの家に行くってくる」

梨紗「何で？」

直樹「ちゃんと話さないといけないから」

梨紗「・・・私も行く」

真由美「無理しなくていいよ」

梨紗「私のことだから」

直樹「分かった、乗って」

○泉家・リビング

梨紗、真由美、直樹が座っている。

向かいには泉と純子。

直樹「と言うことで、今後も梨紗ちゃんはどう
ちで預からしてもらいます」

泉「こんな不良品、欲しければくれてやる」

真由美「あんた親でしょ？よく自分の娘にそ
んなこと言えるね。だから梨紗は・・・」

梨紗「真由美さん」

真由美、梨紗を見る。

梨紗「今日限りでこの家族とは縁を切る」

泉、梨紗を見る。

梨紗「長い雨の中を1人で歩いてきた。その
雨の中で心が枯れていった。でも傘を差し
てくれた。雨が止むまで隣に居てくれた。
傘を閉じて見上げた空は、こんなにも綺麗

で、温かさを教えてくれた。この家では得られないものが外の世界には沢山ある。私にはもう家族はいない。だけど、1つだけ感謝してる」

泉、梨紗を見てる。

梨紗「産んでくれてありがとう。だからこの人たちと出会えた」

梨紗、立ち上がりリビングを出て行く。

真由美、梨紗の後ろ姿を見てる。

○同・前の通り

雨は止み、太陽の光が照らしている。

梨紗、車の前に立っている。

真由美と直樹、家から出てくる。

真由美、梨紗の前に立ち髪の毛をクシヤクシヤつと撫でる。

真由美「帰るか」

梨紗「うん」

真由美、空を見上げる。

真由美「良い天気だね」

直樹「そうですね」

梨紗、空を見上げると晴れ渡っている。

○撮影スタジオ

ドラマの撮影をしており、多くのスタッフが行きかっている。

優花、彩、橋本、椅子に座って出番を待っている。

そこにA Dがやって来る。

A D「準備出来ました。お願いします」

優花「(笑顔で) はい」

A D、去って行く。

橋本「毎日毎日、その薄っぺらい笑顔で媚びてて、ご苦労だね」

彩、橋本を睨む。

優花「この仕事って、知らない誰かに褒められたり、時には貶されたりします。私は何を言われるかじゃなく、見てくれる人に何が出来るかを大切にします。だから何とでも言っして下さい。もう折れないので」

彩、優花を見て微笑む。

優花、スタジオに向かう。

橋本「何だあいつ」

彩、立ち上がり

彩「あんたもちゃんと考えなよ、この仕事の意味。売れてるからって偉いわげじゃない。

どれだけ表面を飾りつけても、根が腐ってたらいずれ枯れていく。見えない部分に何を持ってるか、それが大事でしょ？」

彩もスタジオに向かう。

橋本「意味分かんねー」

○司家・居間

直樹、真由美、梨紗が入って来る。

居間には司と翔太。

直樹「戻りました」

翔太「おかえりなさい」

直樹「翔太君、来てたんだ」

翔太「生きてるか確認しに来ました」

梨紗「暇人」

翔太「うるせえ」

梨紗、真由美、直樹、座る。

翔太「貸した漫画読んだ？」

梨紗「後ろのあらすじは読んだ」

翔太「本編読めよ」

梨紗「あらすじで全部理解できた」

翔太「じゃあどんな漫画？」

梨紗「薬で小さくされた主人公が海賊王を目

指しながら鬼と戦って事件を解決する」

翔太「ねーよそんな漫画」

真由美、2人のやり取りを見て微笑む。

直樹、庭にある紫陽花を見る。

直樹「雨上がりの紫陽花も綺麗ですね」

司「雨に打たれてた分、太陽の光がより紫陽

花を輝かせてる」

梨紗、縁側に行き紫陽花を眺める。

真由美、梨紗の隣に座る。

真由美「紫陽花の花言葉覚えてる？」

梨紗「冷淡・・・移り気・・・無情」

真由美「あとね、家族って言葉もあるの。小

さい花が集まって家族の結びつきを連想させる。うちの人たちは誰も血が繋がってないでしょ？だから司が植えたの。本当の家族になれるようになって」

梨紗、紫陽花を見る。

直樹「真由美さん、アイス買ってませんでした？」

真由美「あっ、車に忘れた」

真由美、居間を出る。

梨紗、再び紫陽花を見る。

梨紗 M「また雨は降る。でも今までとは違う。

悲しみの連鎖で続く雨の中で、美しく咲くための慈雨を知った。その雨で芽は育ち青葉をつけた。そしていつか咲き誇れるよう、私の周りには光が射した」

紫陽花から雨の雫が滴る。

終